



奥田若菜 著  
『格差社会考—ブラジルの貧困問題から考える  
公正な社会』

神田外語大学出版局 2021年 x+182ページ

ISBN 978-4-8315-3014-1

本書は、人類学者およびブラジル研究者である著者が、格差の著しいブラジル社会をおもな事例として、顕在化しつつある世界および日本の社会の「格差と貧困を考えるため」に著した書である。ブラジルの格差や貧困に関する調査研究を続け、この問題について大学で教鞭を執るとともに日本社会のあり方に関心を寄せる著者は、「ブラジル社会は、私たちが生きる社会の格差や貧困を理解し、望ましい公正な社会へと思考をつなげるためのヒントとなるはず」だと主張する。啓蒙書的な意味合いの強い本書では、格差と貧困を量的および質的データをもとに多角的にとらえ、これらの概念への理解が深まるよう、できるだけ平易な文章で議論が進められていく。そして、著者は本書の最後で、望ましい社会とは「格差はあるものの貧困に悩まされている人はいない社会」であると指摘し、その実現に重要なもののひとつとして「連帯」を挙げる。格差社会で見えにくい他者の貧困を解決する責任を、共同で担おうとする姿勢が連帯であり、他者の状況を理解する能力（エンパシー）が求められていると説く。

「まえがき」で始まる本書は、「序」のあとの1章で「数字と歴史でみる格差社会」について概説する。2章では、日米英を含めた「格差社会における貧困の責任論」を紹介するとともに、格差と感染症についても論じる。3章では、労働形態や移住という観点から「マジョリティとしての貧困」を説明し、4章では階層間の移動や差異に焦点を当てながら「中間層と富裕層、そして貧困層」について解説する。5章「社会問題と格差」では、ブラジルにおける人工中絶、人種、アフーマティブ・アクションをめぐる議論などを展開する。そして、本書の結びとなる6章「より公正な社会を目指すために」において「私たちが生きる社会を考える」、という構成になっている。また、各章の終わりにコラムを付載し、巻末には世界やブラジルの貧困・格差に関するおすすめ本やサイトを掲載している。

著者が述べるように、「格差・貧困とはなにか」という漠然とした問いが、本書を読むことでより具体的な問いとなるとともに、身近な問題であることに気づかされる。とくに紹介者にとって、多様な人びとのほんの一部としか付き合っていない社会では多くの他者が見えていないことを自覚し、格差や貧困を社会の一部である自分に関連する事柄として把握する、という視点が自戒の念とともに深く印象に残った。ブラジルをはじめ、日本を含む世界が目指すより公正な社会について啓発してくれる本書は、学生を中心にこの問題に関心のある人に多くの示唆を与えてくれる。

近田亮平（こんた・りょうへい／アジア経済研究所）